

大きな黄色い花を見て、この時はど唐茄子の花に心をひかれた事はありませんでした。よく見ればなかに整つた花ですね、花といへば露草はふるひつきたい様なフレッツシユな色をしてゐます。空の端がどうかした拍子に地に落ちて出来た花ださうです。その故かみんな仰向いて空を戀しがつてゐます。眞珠の様な露の玉は人にかくれて泣く、戀しさの涙なのかもしれない(この想像は少し厭味ね)濱ひるがほや、鬼百合や、大根に似た何とかいふ花や、藪かんぞうや一足踏み出せばいろんな花のあるこの地はうれしう御座います。人間の文明を遠くながめてゐる當地にも自然は大きな恵を下さるのです。ふだん私共はちつともこんな事をありがたく思つちやゐませんけれども、杉菜に置いた露一つにも、人間の眞似の出来ない巧みさを持つた自然がいろんな花を咲かせて、旅にゐる私たちの心の糧を豊にして下さるのをおろそかに忍ばずにおられませうか、私を慰めてくれる草にも木にも一々お辭儀がしたくなりまして。もう二日で歸ります。

□

□

鎌倉から箱根へ (一)

文三時

雨

六月二日。七時少し過ぎて江の島を出發した、えびすやの前で〇から張く手を握られた時はさすがに悲しかつたが宿の窓からひれならぬ手巾を振る友をみかへりながら例の橋を渡る頃はもう嬉しかつた。一行はN先生H先生の他九人。昨日迄の騒しい旅に比べてしんみりとして旅らしい感じがする。電車を長谷で下りて先づお観音様に詣る。餘り丈の高いお観音様は二本の弱い蠟燭の火ではお顔がみえぬ。何時か誰かゞ沙翁の作物はわからないから有難いのだと云つた。そのお観音様は見えぬから有難いのだなど早合點した。お堂の前に大きな銀杏の木が一本「銀杏の木はすぐ公曉を思ひ出しますねえ」とおつしやつたのはH先生。

大佛様は京都のよりも奈良のよりもよい印象を與へた。鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は

美男におはす夏木立哉

それより以上云ふ事はない。

又電車で春福寺に行く。文より質に外形より内容に重きを置いた鎌倉武士の心は鎌倉五山が最よくシンボライズしてゐると思つた。鎌倉の和かな山と淡白でしかも情味のある町の感じがふと鎌倉武士と中世のナイトを思はせた。

停車場前の一茶亭に食事の後鎌倉と最後の別れをつげた。汽車を大船で乗りかへた時に某先生を迎へた。じつとしてゐればうちまでも行かれる汽車を國府津で棄て、電車に乗る。今の小田原町を通りぬけると昔の小田原宿に入る、藁ぶき屋根の軒の低い家の列んだこの町の中を電車にのつて通るのは餘り慘酷だと思つた。町を出ると早川の岸になる。清流に糸をたれてゐる風流子に去年の夏父と太田川の釣釣りに行つた事を思ひ出た。湯本につく。電車はこゝまでしか進まない。H先生にお別れして先づ早雲寺に行く。後北條氏五代の墓は苦むしかたむいてみるかげもない。鎌倉以來かうして苦むした墓をみる度に何故墓なんか作るかを疑つた。生れたら生きればよいので死んで後まで生きた日のかすなごを残す

にも及ぶまいにど。

早川溪谷に沿つて上る道が進むにつれて谷は深く深々の響はいよゝ高くなる。昔の水準のあとが山の中腹に一段同じ高さに削られて残つてゐるし此邊の山のまるくしてゐるのは昔の湖の水が溢れてそれを被つた爲だとN先生はおつしやつた。「桑田變じて海となる様がまざゝ見えてあさましい。」この道で數々横柄な自動車に埃をかけられた。人を馬鹿にした様な音を立て、人を追ひ散らし舉句に後足で埃をかける。「文明もそれまで進めば澆季の至り」遠くから地響が聞えるともう戦慄せずにはゐられない。大平臺邊りから大分山らしくなつて向ふの林とこちら森との鶯が鳴きはしてゐる。路端にルビーの様な色をした木毒が實つてゐる。まもなく宮の下に入る。宮下はバタ臭い町で何かホテルが列んでゐる。その間に外人向のお土産品を賣つてゐる家がある。宮下に續いて底倉がある其口につたやば有つた。先に居らしたH先生に御挨拶もそこゝ同勢十人温泉に飛び込んだ。愉快、愉快、實にその愉快さはその十人きり味ふ事は出来まい。浴室の窓のそば

に枋の木がある。やはらかい感じのする緑の大きな葉が風にゆさ／＼揺ると花はないけれど芳い香が浴室内にみなぎる様な気がした。夜は級會があつて旅の夜を楽しく過した。ねる前にnoと二人してお湯にまた入つた。とけこむ様な快を食つて部屋に歸つて来たときもう皆眠つてゐた。

六月四日、雨と聞きまがはされる谷の水音に夢を破られ朝からお湯に入る。ちつとお湯につかりながら相變らずゆさ／＼ゆれてゐる枋の葉を見ながら谷の音に耳をすました時私の心はふと郷里の母を思ひ出した。不治と云はれるその病になやむ母を一度こゝにつれて来たい。そしてこの樂しみを分ちたいと思つた。

い。こゝから大湧谷に行く。路は普通の山登りと變りはなかつた。時節がら路には涼しい翠蓋がかざされ路ばたにはいろんな花が咲いてゐる。林の中から折々山時鳥の鳴くのさへ聞える。「卯の花の香ふ垣根に時鳥早も來鳴きて」と私共は歌ひながら進む。

早雲地獄の邊りから山に木はなくなつた。硫黄の爲にぼろ／＼になつた岩石の上を白水の様に濁つた水の流れる谷にそつて登ることは實に不愉快であつた。空氣はだん／＼硫黄くさくなつて来る。それでも先導になつて登り、一番に頂上の茶やをみ出した時はむやみに嬉しかつた。頂上には二つ三つの穴が明いて中には泥の融けたのが濠々音を立て、流れてゐる。その上から湯氣や煙が盛に立ちのぼる。ふりかへつてあたりをみ廻すと實に壯大な感じがする。始めて火山爆發などの跡に立つた私は何ともいへない氣持ちがした。

雜報

第三十六回文科學術談話會記事

小春日和らゝかな十月十四日の午後一時から我が文科會では左の順序で學術談話會を開きました。

- 一 文科の本質
- 二 英文朗讀
- 三 叙情詩として見たる平家物語
- 四 國文朗讀
- 五 中條百合子氏著實しき人々の群を讀みて
- 六 お伽話

- 桑木博士
- 文二 岩田
- 文三 赤木
- 文一 太田
- 文三 粒木
- 文四 植田

桑木博士の御話とか、れた掲示が人々の心を引いたのでせう、他の科の方も随分御出席下さつたやうでした。しかし學校の方では行啓といふお目出度い日を控へて忙がしい折柄でしたので、先生方に御出でを願ふ事が出来ませんでしたのは残念で御座いました。それでも垣内先生もお見えになりましたし、千葉先生や女學校の先生方が多勢御出で下さいまして、取り急いで開會いたしましたのにも係はらず、會らしい會として見る事が出来ました事はうれしう御座いました。午後一時半に開かれた會は日が暮れても電氣の光を頼りに續けまして五時半頃に終りました。その間御話や朗讀をなすつて下さいました方々には勿論熱心になさつて下さいましたし、おさき下さる方は折角御出で下さつたのですから熱心に御聞き下さつた事で御座います。しかし文科會にいたしましたも、會誌の方に致しまして、まだ／＼皆様の熱心の度の足りない事は誰にも容